草書
行書

# 屏風土代〔国宝〕

小野道風　平安時代・九二八年

教科書22ページ　宮内庁三の丸尚蔵館蔵

## 釈文

（艶陽尽幾処）
相思。招客迎僧
欲展眉。春入林
帰猶晦迹。老
尋人到詎成
（期。…）

## 書き下し文

（艶陽尽くる処幾たびか）相い思い、客を招き
僧を迎え眉を展べんと欲す。春は林に入り帰
りて猶お迹を晦すがごとくし、老は人を尋ね
て到る詎ぞ（期）を成さざるに。（…）

## 大意

春も終わろうとするころ幾たびか思うのは、客を招き僧を迎えて心を喜ばせようとすること。春は隠棲して跡をくらますようにし、老いは人を尋ねて約束もせずにやって来る。（…）

草書
行書

# 離洛帖〔国宝〕

藤原佐理　平安時代・九九一年

教科書 22ページ　畠山記念館蔵

## 釈文

〈佐理〉謹言。離洛之後、未承動静、恐鬱之甚、異於在都之日者也。就中、殿下何等事御坐哉。

## 書き下し文

〈佐理〉謹みて言す。洛を離るるの後、未だ動静を承らず、恐鬱の甚だしき、都に在るの日に異なる者なり。就中、殿下何等の事御座るか。

## 大意

佐理が謹んで申し上げます。京を離れた後、いまだご消息を伺っておらず、恐れ多いこと、都にあるころにもましてことさらでございます。とりわけ、殿下はどうしていらっしゃいますでしょう。

草書
行書

# 白氏詩巻〔国宝〕

藤原行成　平安時代・一〇一八年

教科書 23ページ　東京国立博物館蔵

## 釈文

促席留歓日未曛。遠
坊思帰已粉々。無妨接
轡行乗月。何必逃盃走
似雲。銀燭忍抛楊柳曲。
（…）

## 書き下し文

席を促し歓びを留めん日未だ曛れず、遠坊の
帰思已に紛々たり。妨ぐる無し轡を接じて行
くゆく月に乗ずるを、何ぞ必ずしも盃を逃れ
て走ること雲に似ん。銀燭忍びて抛つ楊柳の
曲、（…）

## 大意

席を近くしてもっと楽しみましょう日はまだ暮れていません、なのにみなさんは遠いお宅に帰りたくてそわそわしていますね。手綱をとって馬で月を賞でながら行ってはいかがですか、盃を逃れて雲のように走り去るに及びますまい。銀の燭台の前で私はさびしさをこらえて楊柳の曲を奏で、（…）